

日付	曜日	活動内容 & 場所	備考
5月11日	月	Pilke Aarteiden talo	
5月12日	火	Päiviönsaaren päiväkoti	
5月13日	水	Päiviönsaaren päiväkoti	
5月14日	木	National Day(祝日) 休み	
5月15日	金	Päiviönsaaren päiväkoti	
5月16日	土	休み	
5月17日	日	ヘルシンキ→アムステルダムへ移動 (フランクフルト経由)	移動

～アトリエと自然環境を学びの基盤とした、表現から広がるインクルーシブ教育について学ぶ～
(2026年5月11日～13日、15日)

研修施設：Pilke Aarteiden talo

フィンランド・トゥースラ市にある「Pilke Aarteiden Talo」での実践からは、「子どもが安心して自分らしく育つための環境づくり」が、日々の保育の中に自然に組み込まれていることを強く感じるものであった。

園では、少人数グループを基本に生活や活動が行われており、子どもたちは音楽、製作、外遊びなどを落ち着いた環境の中で体験していた。朝のサークルタイムでは、歌や会話、色探しなどを通して穏やかに1日が始まり、保育者は「順番を守る」「座って話を聞く」といったルールを丁寧に繰り返し伝えていた。しかし、その関わり方は決して一方的ではなく、子どもの気持ちや主体性を尊重しながら、安心して集団生活に参加できるよう支える姿勢が印象的であった。誕生日を迎えた子どもをみんなで歌って祝う場面もあり、子ども同士や保育者との温かな関係性が感じられた。

また、今回の研修では、表現活動を大切にする保育の姿にも触れることができた。実際に、子どもたちが紙皿に絵具で色を付けながら集中して取り組む様子を見る機会があり、一人ひとりが自分なりの表現を楽しみながら活動していたことが印象的であった。園内の壁面には、子どもたちの作品が自然に飾られており、作品を「評価のための成果物」としてではなく、子どもの思いや表現の過程そのものを大切にしてい



ることが感じられた。保育の中で、表現活動が特別な時間として切り離されるのではなく、子どもの主体性や創造性を育む日常の営みとして存在していたことが印象的であった。

特に印象深かったのは、フィンランドで大切にされている「VASU (Varhaiskasvatussuunnitelma / 幼児教育計画)」についてであった。VASUは、日本でいう個別支援計画や保育計画に近いものであるが、単なる発達評価や課題整理ではなく、「子どもの良さや強みを基盤にする」という考え方が徹底されていた。

実際の記録では、まず「どんな遊びが好きか」「どんなことに興味を持っているか」「どんな場面で力を発揮しているか」といった、子どもの肯定的な姿が丁寧に記述されていた。その上で、「どの場面で難しさがあるのか」「大人はどのように



支援すると安心して参加できるのか」が具体的に整理されていた。例えば、集団活動が苦手な場合でも、「落ち着いて参加できない」と否定的に捉えるのではなく、「小集団であれば安心して参加できる」「事前に見通しを伝えることで落ち着いて活動できる」といったように、“できる姿”を基盤に支援を考えている点が特徴的であった。



また、支援は特別なものとして分離されるのではなく、日常の保育の中に自然に組み込まれていた。視覚的なスケジュール、感情カード、小集団活動、ルーティン、感覚調整のための道具などを用いながら、「子どもを環境に合わせる」のではなく、「環境を子どもに合わせて調整する」という考え方が保育全体に浸透していた。これは、インクルーシブ教育を大切にするフィンランドらしい視点であり、多様な発達や文化的背景を持つ子どもたちが自然に共に生活している姿にもつながっていると感じられた。

さらに、VASUは保育者だけが作成するものではなく、保護者との対話を非常に重視していた。送迎時の小さな会話や日々の様子の共有を積み重ねながら、子どもの成長を一緒に見守る関係性が築かれていた。週1回の職員ミーティングでも、子どもの姿や支援について丁寧に話し合い、必要に応じて専門職とも連携しているとのことであった。VASUは単なる書類ではなく、「子ども・保護者・保育者が一緒に育ちを支えるための対話のツール」であることを実感するものであった。

また、園では子どもの自立を支える環境づくりも徹底されていた。玄関には持ち物や衣類の置き場が視覚的に分かりやすく示され、2~3歳の子どもでも自分で着替えや靴の準備ができるよう工夫されていた。保護者には「子どもが自分で着脱しやすい服を選ぶこと」が呼びかけられており、「自分でできた」という経験を大切にしていることが伝わってきた。

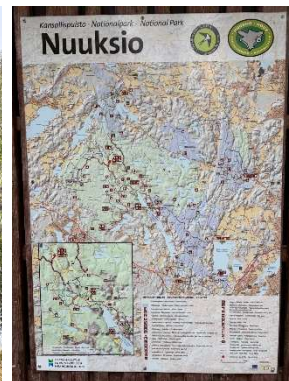
さらに、「1~2歳は抱っこしてほしい年齢です」と書かれた掲示も印象に残った。フィンランドでは、発達を急がせるのではなく、幼い子どもが安心感や甘えを必要とする存在であることを自然に受け止め、その安心感を土台として成長を支えていた。

外遊びでは、森や岩場、斜面など自然環境を活かした遊びが日常的に行われていた。保育者は遊びをただ見守るだけではなく、子どもと一緒に遊びながら、遊びがより豊かに発展するよう関わっていた。「危険をすべて取り除く」のではなく、「安全を確保しながら挑戦する」ことを大切にしている姿勢からも、子どもの主体性を信頼していることが感じられた。

今回の研修を通して、フィンランドの保育は「子どもを管理する」のではなく、「子どもが安心して自分らしく育つ環境を整える」ことを大切にしていることを強く実感した。特に、アトリエ的な表現活動や自然環境を通じた学びは、子どもたち一人ひとりの表現や主体性を引き出し、多様な子どもたちが共に育ち合うインクルーシブ教育の基盤となっていることを学ぶ機会であった。

～フィンランド豆知識～

フィンランドは北ヨーロッパに位置し、国土面積は約33.8万km²で日本(約37.8万km²)よりやや小さい。一方、人口は約560万人で、日本の約1億2千万人と比べると非常に少なく、豊かな森林と湖に囲まれた自然環境が特徴である。中世以降は長くスウェーデン領として支配され、その後1809年からはロシア帝国の自治大公国となった。1917年、ロシア革命の混乱の中で独立を果たした。近年は教育や福祉の充実で知られる一方、ウクライナ戦争や中東・アフリカ地域の紛争を背景に、難民や移民の受け入れも進めている。多様な文化を尊重しながら共生社会づくりに取り組んでいる国である。



Oodi図書館 建築も圧巻。市民は3Dプリンターなど無料で利用できる。

ホテル近くのウスペンスキー大聖堂。



Nuuskio 国立公園

休日は、多くの人がハイキングやキャンプに訪れていた。

季節になると、ブルーベリー、キノコ狩りも楽しめる。

